

■古代の永野

12万年前	下末吉海進
2万年前	海面低下
6千年前	縄文海進

海進、海退により地殻の隆起と火山灰の堆積などでできた陸丘が激しく浸食、谷をつくり、丘陵を形成。

永野は多摩丘陵からのび
ひろがる低丘陵の南端に

位置。その主陵が武相境。大岡川をはさんで三浦丘陵に続いている。丘陵基盤の屏風が浦層から暖流性のハイガイ、ウミニナ、ホトトギス、ブドウガイなどの貝化石約20種類ほど出土。

■ 繩文～弥生時代

弥生遺跡は立地条件から縄文期の遺跡に含まれていることが多い。谷戸田に面した段丘に土器片が散布しており、各所で農耕生活が営なまれていたと推測される。

永野には貝塚は存在しないが、黒曜石の矢鏃数個と凹石、縦形石七、砥石、打製・磨製石斧が出土。



ことが考えられるという。

地層からは大きくわけて3つの貝化石群が見つかっており、これまでに約100種の貝や、絶滅種の「ブラウンシイカゲガイ」や、ホオジロザメの歯なども発見されている。地層のはざと標本は遊水地情報センターで見られる。

子どもたちの校外学習の場に



絶滅種「ブラウンスイシカゲガイ」

化石の発見を受け、藤沢市教育委員会は、藤沢市内の小中学生の校外学習の場として活用を開始。これまでに藤沢市内の4小学校と、6中学校が化石採集を行った。今後も校外学習の場として活用していく方針。県藤沢土木事務所によると、現場は工事中で危険なため、一般的の立ち入りは禁止している。

下末吉期の海岸線
(県立生命の星・地球博物館2004
ワークデキストより)

まで、藤沢市内の小中学生と保護者計20人を対象にした貝の化石発掘の野外学習を実施する。申し込みは8月30日(木)まで。問い合わせは、電話0466(45)1500・こども館まで。

※本文中の日付については上記掲載日のままとなっておりますので、ご注意下さい。



〈貞昌院裏山から出た二枚貝・亀野撮影〉

■ 古墳時代

土師器の分布は、上永谷付近、中里、有華寺台、芹が谷などに縄文・弥生式土器片に混じって散見される。

永野では大規模の古墳は見受けられない。しかし円墳とみなされる○○塚という名称でよばれている墳丘の塚は各所に存在。

開発によって潰滅してしまったものや、中世または近世による経塚や信仰の塚に対比される塚もあると考えられる。



表2 南関東における縄文式土器の編年と永野地区のおもな遺跡の出土状況

■武相国境

現在の港南区エリアは、東半分が武藏国、西半分が相模国である。

武相国境のうち、港南区を通る部分は「七里堀」とも称された。(『新編相模風土記稿』)

国境線は追浜～瀬谷までは分水嶺 (=山稜線) 「水流れる境」『新編武藏風土記稿』

・・・・・ 東側に降った雨は大岡川⇒東京湾へ、 西側に降った雨は柏尾川⇒相模湾へ
瀬谷以北は境川が国境線

武相国境=大和朝廷の勢力が鉄器文明を広めながら通過した動脈路(鍛冶ヶ谷、たたら場)

鳴川沿いには金のつく地名が多い。金井村、金沢、金谷(横須賀)、金谷(房州)

日本武尊東征路、武器の輸送、製造、修理

港南区には白山神社が多い。白山神社は鉱滓と関係が深い。

栄区上郷町「カナクソ(鉱滓)」地区、「鍛冶ヶ谷」

7世紀～9世紀前半にかけて丘陵地域一体を掘削して平地をつくり、製鉄操業を行っていた。

鍛冶ヶ谷式横穴古墳



■文化の差異

【武藏側】

「久保村：東西七丁、南北三丁許、東は大岡川を限て対岸は上大岡村、西南は斜に松本村にして西は相模国鎌倉郡永谷上村、北は最戸村に接す、地形は西の方すべて山にして相武国界なり....民戸三十四軒、東北の方最戸村より西の方松本村に達する一條の往還は前村にいへる金沢及び鎌倉への道なり幅五六尺或いは八九尺に至る村内を徑ること四丁許」『新編武藏國風土記稿』

武藏側には刻像型の道祖神が一体も見られない。

中世には、鎌倉から見て鬼門(東北)の方角にあたり、そのために寺社が多く建立された。

墳墓(やぐら)の北限。近世には江戸広域文化圏に包括される。



【相模側】

相模側双体道祖神、相模型道祖神の北限。

写真は般若寺のはらみ道祖神⇒

■新編相模風土記に見る永野

- 1 野庭（能婆）下野庭一村此郷名を唱ふ、按するに今上野庭村永谷郷を唱ふるは誤なるべし、天文十八年の文書（松岡東慶寺蔵）に野庭と記し、北条役帳に野菜を作る皆当時の偶記なり
- 2 永谷（奈加也）管する村十二（永谷上、永谷下、上柏尾、下柏尾、平戸、品野、前山田、後山田、秋葉、名瀬、阿久和、上野庭）北条役帳に永谷の名初めて見ゆ郷名に唱へしは古きことにあらず
- 3 永谷川（馬洗川）

戸部川（登辺可波）（馬洗川、永谷川、赤関川、柏尾川、小館川附）源下野庭村より起り永谷上村に至り、馬洗川と呼び上柏尾、下柏尾、名瀬三村にては永谷川或は赤関川とも称す寺田町以下九村（矢部町戸塚宿上倉田下倉田長沼金井田谷飯島長尾台）に至りては柏尾川と唱へ岡本村にて始めて此川名を得流末十一村（岡本笠間大船小袋谷台山崎植木高谷上町谷宮の前小塚）戸部川と称す、又小館川と唱ふる村四（梶原村にて此川名起る笛田寺分弥勤寺）あり、末は川名弥勤寺二村の境にて境川に合す（幅六尺より末は十間許に及ぶ）此水流を以て田間に沃ぎ水田を耕植する村許多あり（永谷上永谷中戸塚宿三ヶ町長沼上倉田下倉田下柏尾下柏尾閑谷岡本植木前山田十四村なり）水防堤を設く（高七尺よりニ丈）
※戸部川の記述は誤りか？
- 4 鎌倉古道、小菅谷村本郷六村の一なり、鎌倉道西南の方を通ず（幅二間よりニ間半に至る、又古道と称するあり、南方笠間村界にて今の道より北に折れ村の中央を貫き永谷村に達す幅六尺より九尺に至る、按するに正保の国図には此道を本道とす）
- 5 永谷上村（奈我也加美牟良）江戸より行程十里、永谷郷に属す、小田原北条氏割拠の頃は宅間伊織綱頼知行す（役帳曰「宅間殿二百五十貫文、東郡永谷普請役は有之出錢其外御用時は以御直書可被仰出」又村内天神社縁起に天文十二年領主宅間伊織藤原綱頼社頭を再建せし事見ゆ）蜷川相模守親文が采地なり（昔は松平大和守、山田立長、鈴木隼人、蜂屋七兵衛等知行せしが文化八年松平肥後守容衆領分となり、文政四年今の地頭に賜ふ）民戸五十、天正十四年十二月藍瓶の税務を諸村に課せし文書に永谷の名見えたり（足柄下郡板橋村京紺屋藤兵衛蔵文書曰「前岡永谷右之在所不入与申紺屋不出候由、曲事に堅申付可取、若猶兎角申不出候はば可申上他郷へ越し候共、其在所迄ただし、役口可取者也仍如件、丙戌十二月廿五日、京紺屋津田、虎朱印、江雲奉之」とあり）同十九年彦坂小刑部元正検地の後、今に至りて其の法に隨ふ、旧は当村上中下三分の別称ありしなるべし中古中分の地を分ちて別村を建つ是の中村なり、今当村内を區別して、上分下分の別称あるは共遺れるなりされば中村の地當村と一区たりし故地形大牙して広袤四隣共に弁別しがたし故に爰に括載す

広二十町表三十町（南上下野庭小菅谷三村、西舞岡上下柏尾三村、北平戸村及び武州久良岐郡引越別所二村、東同郡望松本久保別所三村）飛地四町四畝平戸村小名伊予殿根（昔天神神職、伊予と云ふもの居住せし跡なれば此称ありと云ふ）有花寺（宇計慈地藏院の所在なり）半在家、丸山、中里、天神前、木曾、水田、鍋谷、宮田、山谷、馬洗川南北に貫けり（幅三間元禄国図にも馬洗川と載す、鎌倉古路係りし頃此流にて馬を洗ひしより此名ありと伝ふ）橋を架す（長三間半）有花寺橋といふ

■かまくら古道

「けもの道」「黒曜石の道」「稻作の道」

頼朝により整備され、平常時は流通の経路として、また、「いざ鎌倉」として整備された。「鎌倉道」「鎌倉街道」とも呼ばれる。低地を避け尾根伝えの道を、しかも最短になるよう結ぶ。幅は6~9尺程の広い道。

上之道（上路）：武藏府中・関戸・藤沢・鎌倉

新田義貞の鎌倉攻め進撃路

中之道（中路）：武藏府中・鶴ヶ峰・名瀬・小菅谷・鰐川・鎌倉

頼朝が奥州平泉侵攻の際通過

・畠山重忠滅亡の地

下之道（下路）：下総、上総・浅草・鶴見・保土ヶ谷・弘明寺・

餅井坂・大久保・馬洗橋・日限山

→中之道と合流

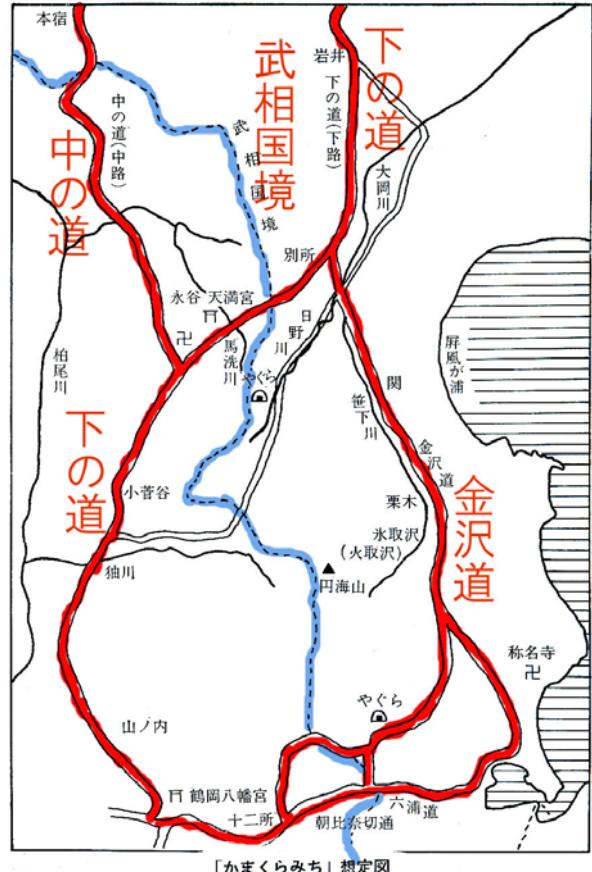
「鎌倉古道、小菅谷村本郷六村の一なり、鎌倉道西南の方を通ず(幅二間よりニ間半に至る、又古道と称するあり、南方笠間村界にて今の道より北に折れ村の中央を貫き永谷村に達す幅六尺より九尺に至る、按するに正保の国図には此道を本道とす)」『新編武藏国風土記稿』

◆政子が馬を洗ったとされる馬洗橋

「馬洗川南北に貫けり、幅三間、元禄国図にも馬洗川と載す。鎌倉古路係りし頃此流れにて馬を洗いしにより此名ありと云ふ」『新編相模風土記稿』

◆頼朝・政子の祈願所としての弘明寺、尼將軍自刻座像を祀る乗蓮寺、

岩難坂の正子の井戸



早駆けの道 鎌倉武士が「いざ鎌倉」のとき、馬で鎌倉へ駆けつけるための道。

下永谷・日限山・舞岡・小菅ヶ谷・笠間・常楽寺・小袋谷・鎌倉

七里堀（武相国境沿の道）「山塚に七里堀と云ありこそ爰より吉原、松本、久保、最戸、別所、中里の六ヶ村を経て引越村（六ッ川）に通じる里程七里許を以って七里堀と唱ふ。」

この古道はかまくら海道なりしか東海道開けてよりこの道は廃し、今は小径残れり、……」『新編武藏風土記稿』

港南区内の石造物(石塔)

(1) 形態・信仰による分類

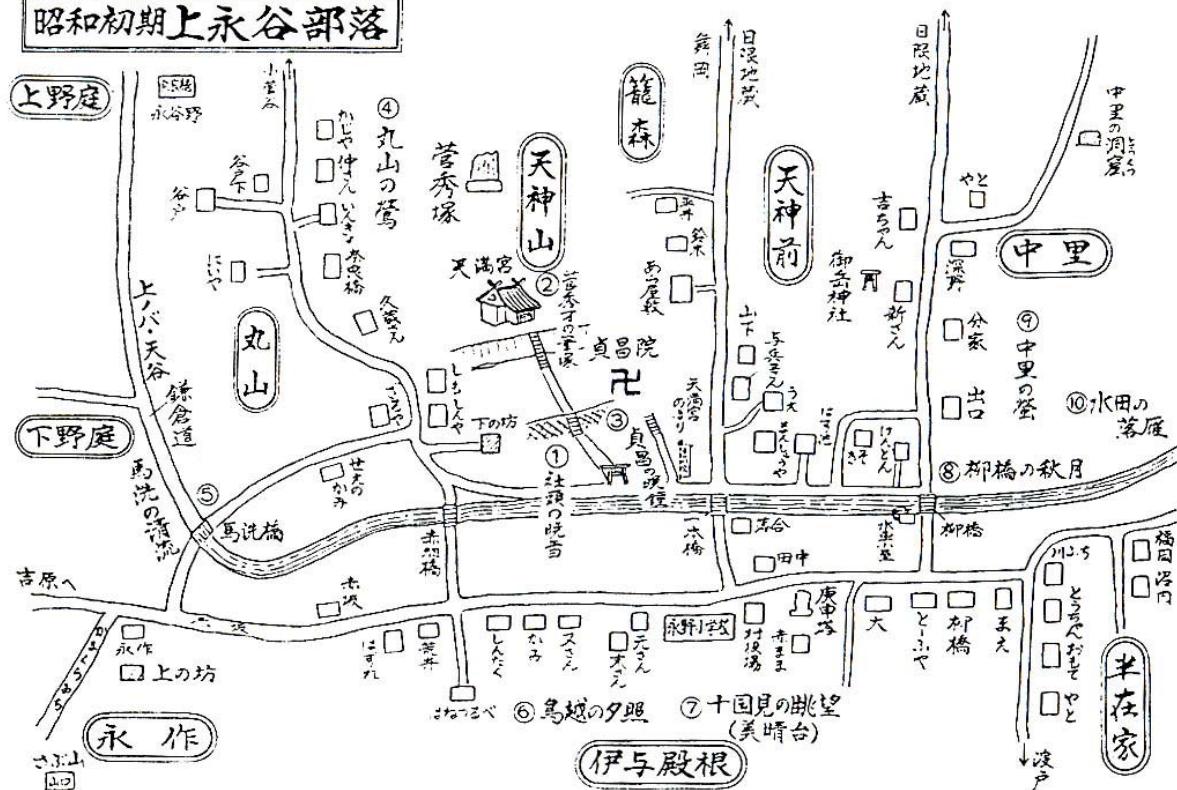
【形態】 宝塔、宝篋印塔、五輪塔、燈籠、層塔、板碑、磨崖仏、石祠、顕彰碑、記念碑、道標

【信仰】 庚申塔、地神塔、道祖神、供養塔（出羽三山講供養塔、木曾御岳講供養塔、富士講供養塔）、日・月待塔、念佛塔（百万遍念佛塔、寒念佛塔）、無縁塔、鳥居

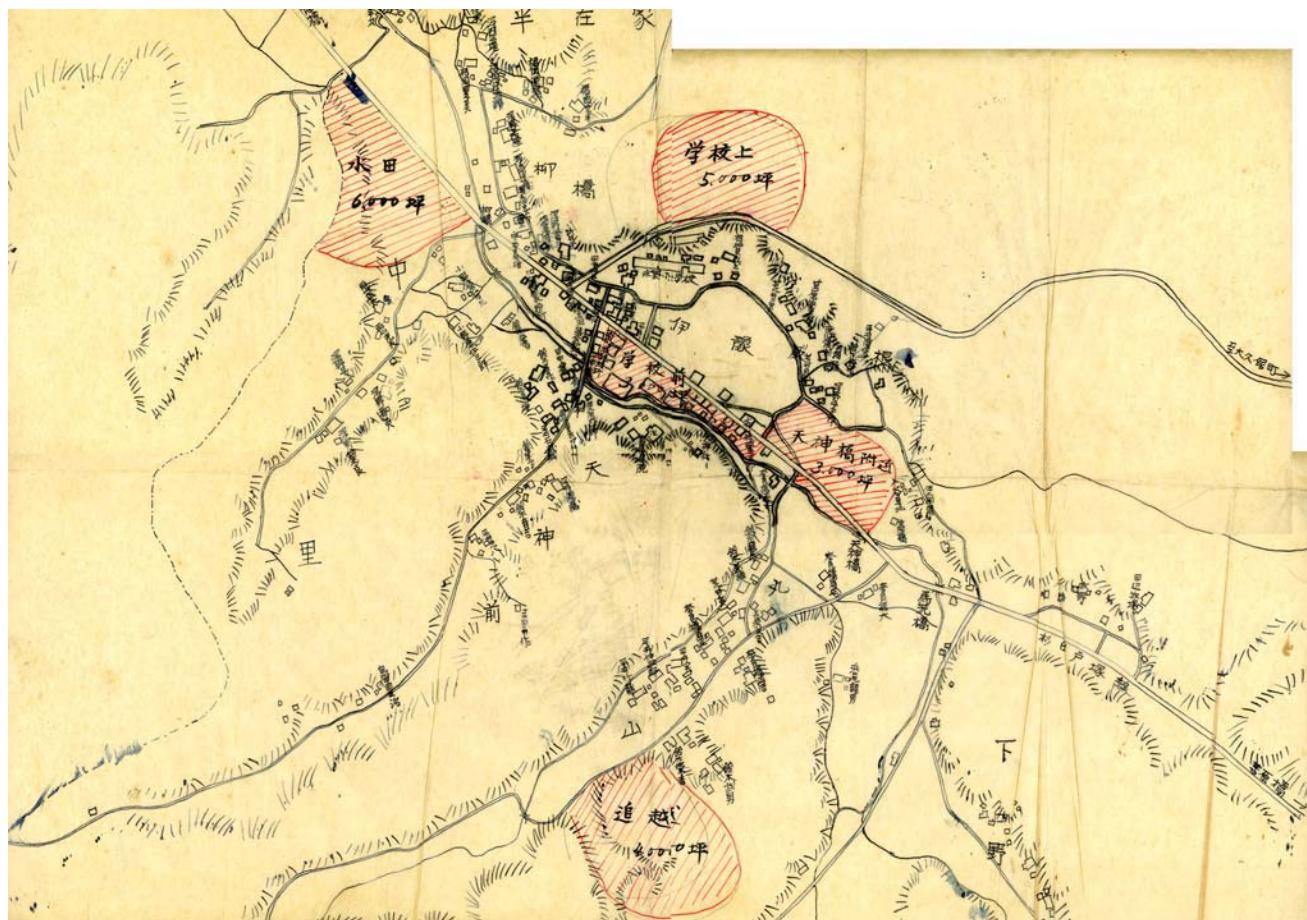
■港南区の主要な歴史年表 (江戸時代以降:参考・横浜市港南区役所ふるさとこうなん)

江戸時代	現在の港南区の地域は、武藏国久良岐郡に属する上大岡・雑色・関・松本・最戸・久保・宮ヶ谷・宮下・金井・吉原の各村と、相模国鎌倉郡に属する永谷上・永谷中・上野庭・下野庭の各村からなっていた。
明治初期	永谷上村と永谷中村が合併して永谷村に。
1872年(明治5年)	雑色・関・松本の3か村が合併して笹下村に、宮ヶ谷・宮下・金井・吉原の4か村が合併して日野村に。
1873年(明治6年)	日野小学校の創立
1878年(明治11年)	笹下の東樹院隣接地に久良岐郡役所を開設。
1889年(明治22年)	笹下村と日野村が合併して日下村に、上大岡村・最戸村・久保村の3か村が合併して大岡川村に、鎌倉郡の各村が合併して永野村に。
1913年(大正2年)	町に電灯がつき始める。
1920年(大正9年)	上大岡駅前の鎌倉街道沿いに水道が敷かれる。
1923年(大正12年)	関東大震災で大きな被害を受ける。
1927年(昭和2年)	第3次市域拡張。久良岐郡日下村・大岡川村が横浜市に。区制施行に伴い、日下村・大岡川村は中区に編入。中区上大岡町・笹下町・日野町・最戸町・大久保町と改称。
1929年(昭和4年)	弘明寺～日野町間に市営バスが運転開始。
1930年(昭和5年)	湘南電気自動車(現:京浜急行電鉄)が黄金町～浦賀間に開通。上大岡駅開設。(戦後には閻市から発展した箱根通りが駅から続いていた)
1933年(昭和8年)	日野共葬墓地(現:日野公園墓地)開設
1936年(昭和11年)	横浜刑務所が根岸から現在地(港南四丁目)に移転。市域拡張で、鎌倉郡永野村は中区に編入。中区上永谷町・下永谷町・野庭町と改称。
1943年(昭和18年)	中区の一部56か町の区域をもって南区を新設。
1945年(昭和20年)	横浜大空襲(港南区は空襲を免れる)
1950年(昭和25年)	南区役所港南出張所開設(管轄内の世帯数3,990戸、人口19,748人)
1953年(昭和28年)	神奈川県戦没者慰靈堂、講和条約締結記念事業として建立。
1957年(昭和32年)	市営バスが野庭口～横浜間を運行。
1969年(昭和44年)	南区の一部8か町の区域により港南区を新設。(人口95,545人)。
1970年(昭和45年)	人口10万人突破
1971年(昭和46年)	港南区総合庁舎落成港南保健所・港南消防署・港南公会堂(11月)開設
1972年(昭和47年)	横浜市高速鉄道1号線(市営地下鉄)が上大岡～伊勢佐木長者町に開通。
1973年(昭和48年)	国鉄(現:JR)根岸線全線開通、港南台駅開設
1974年(昭和49年)	環境事業局港南工場完成
1975年(昭和50年)	人口15万人突破
1976年(昭和51年)	市営地下鉄(上大岡～上永谷)が延伸、港南中央駅・上永谷駅開設。
1979年(昭和54年)	区制10周年記念式典区の花に「ひまわり・ききょう・あじさい」を制定。横浜横須賀道路の一部開通
1980年(昭和55年)	上大岡駅前にバスターミナルが完成。
1984年(昭和59年)	人口20万人突破
1994年(平成6年)	区制25周年。区のシンボルマーク・鳥(シジュウカラ)・木(クロガネモチ)
1998年(平成10年)	環状2号線暫定開通港南ひまわりトンネル(市内最長547m)開通
2009年(平成21年)	区制40周年

昭和初期上永谷部落



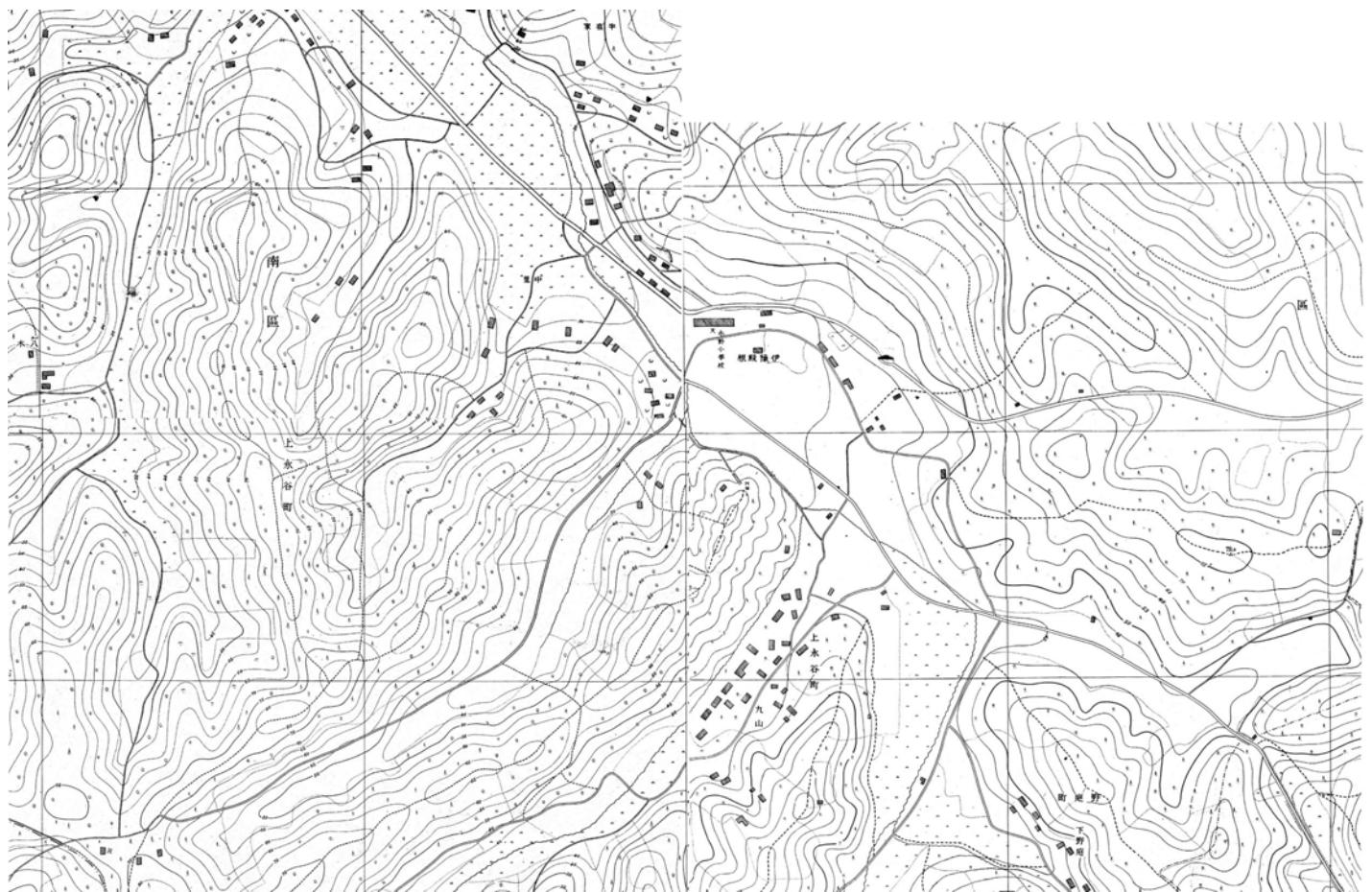
昭和初期の上永谷 『天神さまと梅』より



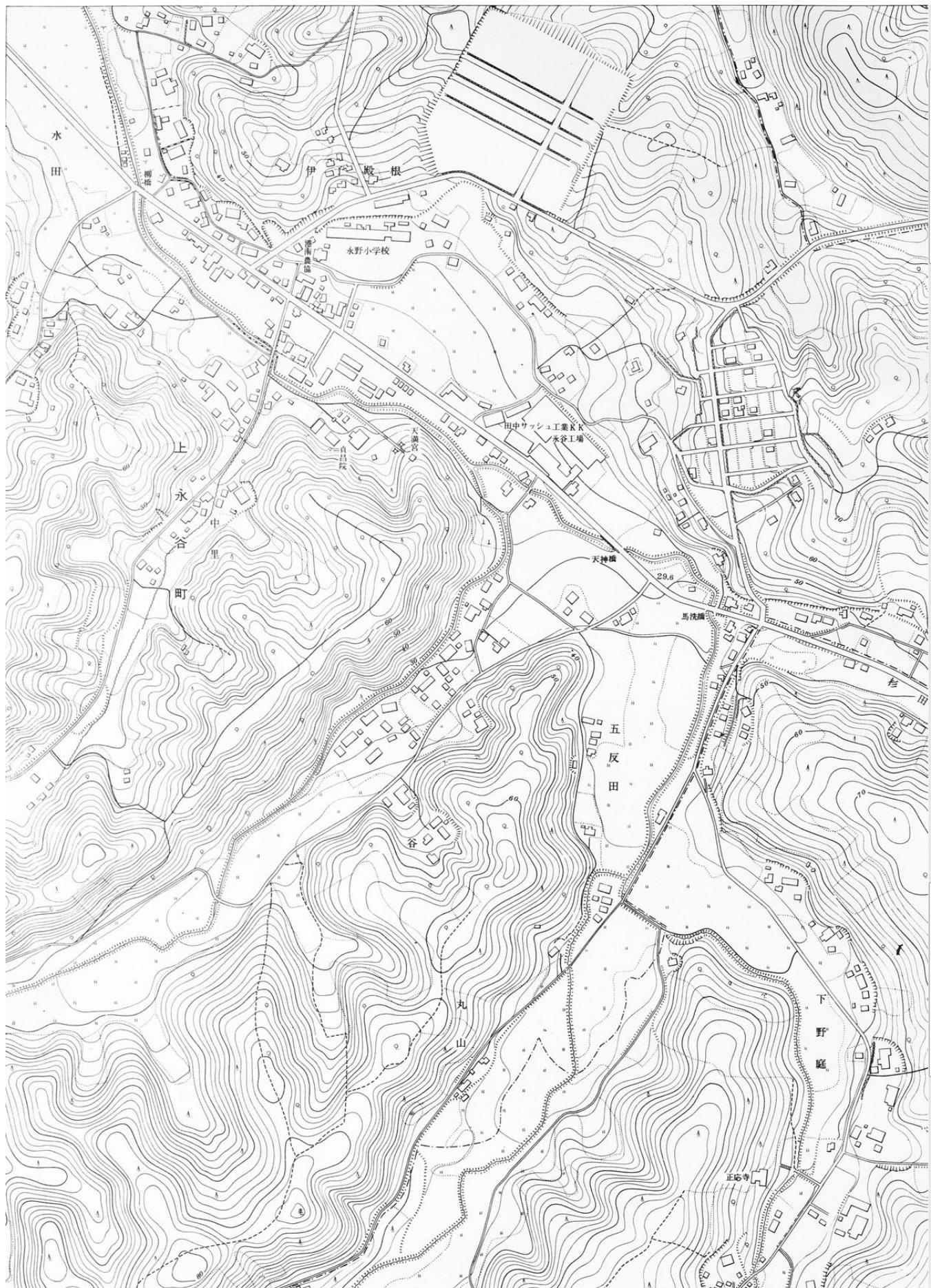
戦前の上永谷（貞昌院先代住職による絵図）より



第一軍管区地方 2万分1迅速測図（明治初期） 実線は現在の幹線道路

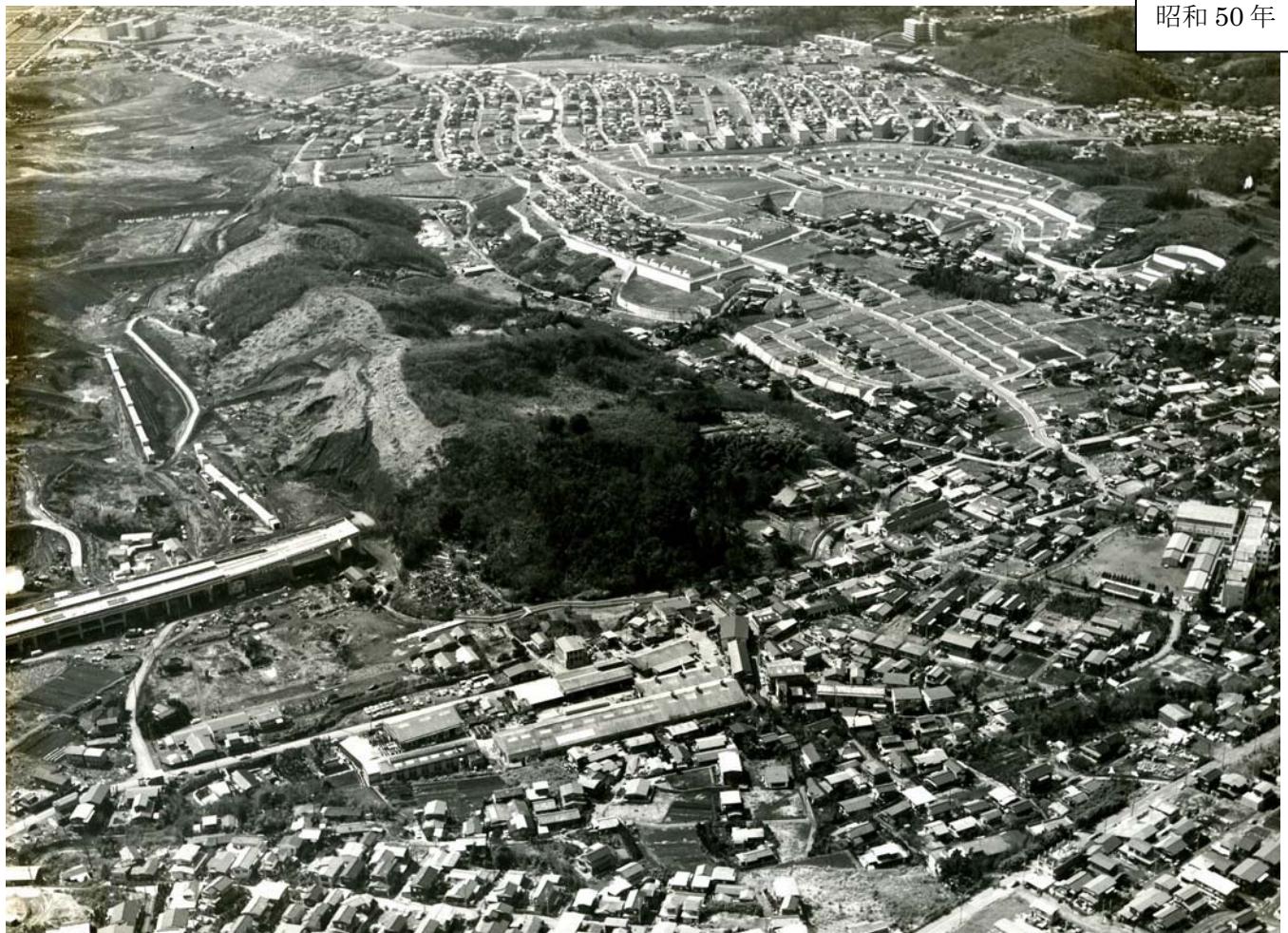


横浜市三千分1地形図（昭和22年）



横浜市三千分一地形図（昭和 38 年）

昭和 50 年



航空写真で見る、永野の街の変遷



S22



S52



S31



S63

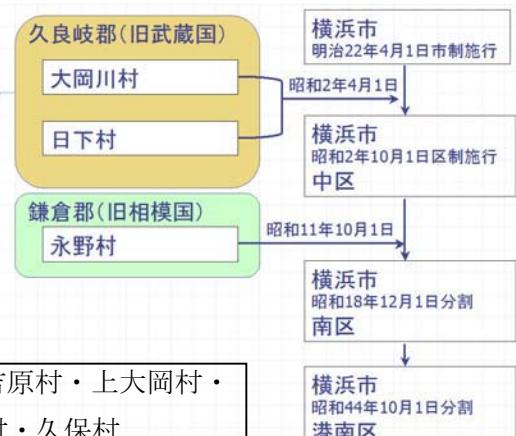
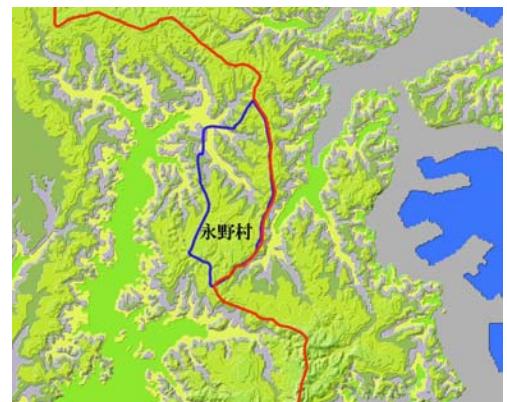


S43



H17

■永野村がなぜ港南区に編入されたのか？（⇒なぜ港南区を武相国境が通っているのか）



江戸時代の港南区エリアの村々

武藏国側（国境東側大岡川水系） 宮ヶ谷村・金井村・宮下村・吉原村・上大岡村・
雑色村・松本村・関村・最戸村・久保村

相模国側（国境西側・柏尾川水系） 上野庭村・下野庭村・永谷上村・永谷中村

その後

武藏国側 宮ヶ谷村・金井村・宮下村・吉原村⇒日野村

武藏国側 雜色村・松本村・関村⇒笛下村

相模国側 永谷上村、永谷中村、永谷下村⇒永谷村

さらに明治の大合併により

武藏国側 久良岐郡大岡川村・日下村

相模国側 鎌倉郡永野村

<武藏側、相模側の交通は相当不便であったために、異なった文化が育まれました>

関東大震災（大正 12 年）以前

永野村・川上村・豊田が組合。伝染病の隔離病舎を合同で建設 ⇒震災により病舎が倒壊

⇒豊田・川上・永野三ヶ村の組合解散の決議をし、永野村は武藏国側の久良岐郡大岡川村、日下村と組合となる。（大正 14 年）

昭和 4 年、平戸と吉原を結ぶ道路が完成 ⇒武相国境を初めて車が越えることが出来るようになる

これを境に、永野村は大岡川村、日下村と密接な関係を持つようになる。

武藏国久良岐郡（大岡川村、日下村）⇒昭和 2 年横浜市（中区）に編入。

相模国鎌倉郡（永野村） ⇒昭和 11 年横浜市（中区）に編入。

■永野小学校の歴史

明治 6 年 日野小学校創立。
明治 10 年 野庭学校創立（現在の常念寺付近）。
明治 12 年 永谷学校創立（現在の下永谷 3 丁目 27）
明治 22 年 町村制が執行され、永谷、上野庭、下野庭
の 3 村が合併して永野村となる。
永谷学校と野庭学校が併合し、永野学校
(本校)、野庭学校 (分校)。
明治 24 年 小学校設備準則により永谷学校が現在の永
野小学校の位置に移転。
明治 25 年 野庭学校が村役場として永谷学校の隣に役
所として移転。永野学校創立



＜写真左が村役場 右が尋常高等小学校＞

明治 26 年 鎌倉郡永野村立尋常小学校と改称
大正 4 年 鎌倉郡永野村立尋常高等小学校と改称、
高等科併設
昭和 11 年 横浜市に編入。横浜市立永野尋常高等小学校
横浜市立永野青年学校併設
昭和 16 年 横浜市立永野国民学校と改称
昭和 18 年 青年学校を桜岡青年学校に統合
昭和 22 年 横浜市立永野小学校と改称
昭和 23 年 給食開始
昭和 41 年 芹が谷分校開校
昭和 42 年 芹が谷分校独立
昭和 45 年 体育館完成・校歌制定、開校記念日とする
昭和 47 年 全校舎鉄筋化完了
昭和 48 年 野庭小学校開校分離
昭和 49 年 日限山小学校開校分離
昭和 51 年 永谷小学校開校分離
昭和 51 年 相武山小学校開校分離
昭和 56 年 丸山台小学校開校分離

■永谷学校と勝海舟の書

慶応 4 年（明治元年）徳川慶喜の家臣、陸軍総裁勝
安房（海舟）の手下、平野玉城が朝廷方官
軍に追われたところを、下永谷で醤油醸造
を行っていた福本宅にて助けられる。

明治 9 年 一命を助けられた平野は、命の恩人福本
輿四郎宅を再び訪れた。その際村人よりに
当地に滞在するよう懇願された。

明治 10 年 村民に推されて棲心庵学舎に第三級訓
導として教職に就く。氏が就任するや入
学者が殺到し、庵が手狭になった。

明治 12 年 水田の権田ヶ谷戸に永谷学校が新築さ
れた。平野はその落成記念にかつての
師、勝海舟に「永谷学校」の書をお願い
し快諾の上贈与された。現在は永野小に
保存。

明治 24 年 平野は鎌倉の長谷にて死去。七回忌の
時、子息平野直吉（第一代永野小学校長）
より玉城の分骨を得、貞昌院墓地に埋
葬。

明治 36 年 氏の徳を慕う人々により、十三回忌が盛
大に行わた。
列席した直吉は感激し、貞昌院 28 世住
職・亀野源量和尚に勝海舟の書「眠雲」
を記念として贈呈された。現在その書は
貞昌院の寺宝となっている。



■永谷天満宮と貞昌院

菅原道真、宝鏡に向ひ躬づから模刻して令子敦茂に興へられし真像なりとぞ、後菅原文時藤原道長上杉金吾等相伝せしを明応二年二月当所の領主藤原乘国（当国八郷を領し永谷郷に居城せしと云ふ）靈夢の告により此地に始て宮社を営み安置すと云ふ、其後天文十二年領主宅間伊織綱頼修造を加へ天正十年同氏規富再造せしとなり。末社妙義白山。妙見。稻荷。別当貞昌院、天神山と号す、曹洞宗（後山田村徳翁寺末）。旧は上之坊下之坊と号せし台家の供僧二字在りしが共に廃亡せしを天正十年に至り、其廃跡を開き、当院を起立す、開祖は文龍（天正十九年四月十六日寂す）と云ふ、本尊は十一面觀音（長八寸行基作）。神明宮二、羽黒社、浅間社、以上貞昌院持」

『新編相模風土記』より引用

「上之坊は上永谷町5358番地附近一帯、現、田辺氏宅東方地域、下之坊は上永谷町3400番地附近一帯、現、鈴木氏宅西方の山腹、故に鈴木家を寺下と呼称す、両坊共に七堂伽藍を具備せしと」

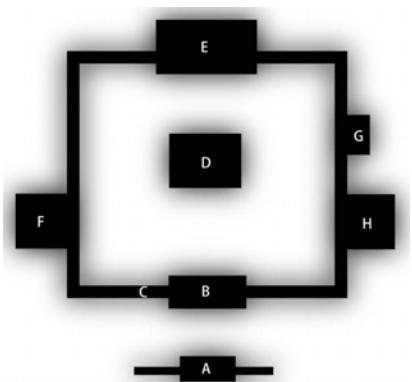
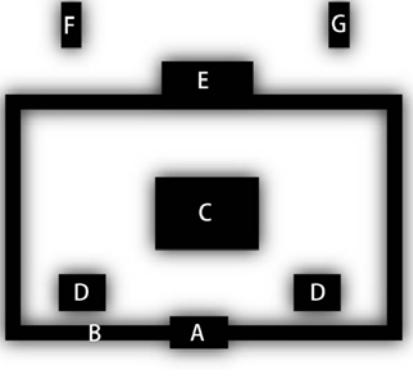
『永野郷土史』

上之坊、下之坊どちらも七堂伽藍を具備していたという記述により、相当の大伽藍であったことが推測される。

「伽藍を構成する主な建物として、俗世間との境界を示す山門、本尊を祀る本堂、塔、学習の場である講堂、僧の住居である庫裏、食堂（じきどう）、鐘楼、東司（とうす）などがある。これらの要素の配置や数は宗派、時代によって異なる。その多くを擁する大寺院は七堂伽藍と呼ばれる。七堂伽藍が何を指すかもまた時代や宗派によってまちまちだが、鎌倉時代の『古今目録抄』では金堂、塔、講堂、鐘楼、經藏、僧坊、食堂となっており、これが一般的に知られている。ただし禪宗で七堂伽藍というと、山門、佛殿、法堂（はつとう）、僧堂、庫院（くいん）、東司（または西淨〈せいちん〉）、浴室とされる。」

禪宗様式でいう七堂伽藍は、山門、佛殿、法堂、僧堂、庫院、東司、浴司ですが、当時は天台宗であったはずですので、金堂、塔、講堂、鐘楼、經藏、僧坊、食堂のことを指したと推測されます。

（参考：『古今目録抄』）

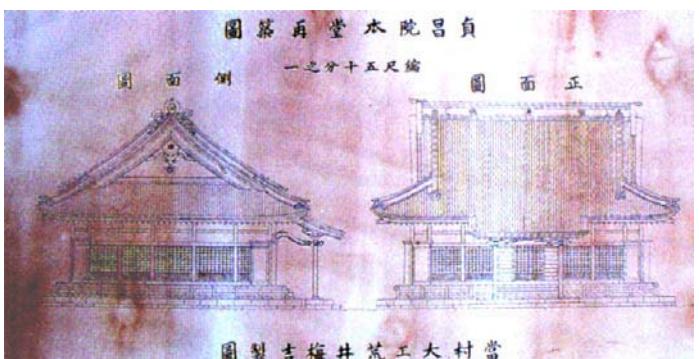
	
禅宗伽藍配置の例<瑞龍寺> A:総門 B:山門 C:回廊 D:仏殿 E:法堂 F:禪堂 G: 鐘楼 H:大庫裏	薬師寺伽藍配置 A:中門 B:回廊 C:金堂 D:塔 E:講堂 F:鐘楼 G:經 藏

「上之坊」「下之坊」は一時廃寺となるが、天正 10 年(1582 年)に当時の領主であった宅間伊織綱頼修造および宅間藤原規富により曹洞宗寺院として再建される。

(開山 戸塚・後山田村の徳翁寺第四世・明堂文龍大和尚)

開創当時は天神社と山を挟んだ位置(下之坊=現在の京急メモリアル付近)にあったが、文化 14 年(1817 年)に、現在の位置である永谷天満宮の隣に移転された。

移転した当初の伽藍配置は絵地図として残されている。

 明治以前の貞昌院の絵地図。本堂、庫裡、方丈、書院など伽藍の配置が示されている。	 本堂再落成図。正面図と側面図が示され、縦 1 分 5 尺 8 勘、横 1 分 5 尺 8 勘の寸法が記載されている。
江戸時代は茅葺屋根の本堂でしたが、明治 19 年(1886 年)の火災(明治 34 年再建)関東大震災により倒壊の被害に遭います。	関東大震災翌年には茅葺から亜鉛葺きの本堂として再建。



昭和初期に撮影された貴重な写真。
永谷川の対岸から貞昌院を撮影したものである。

左に永谷天満宮の鳥居、中央に山門、その奥に鐘楼堂、亜鉛葺本堂、右に庫裏の屋根が見える。
貞昌院境内の 2 本の銀杏の木は、この写真ではまだ樹高数メートルしかない。

鳥居の奥、ひときわ大きな杉の木は永谷天満宮の御神木の大杉。

落雷や環境の変化により、昭和 49 年に地上 2 メートルの位置で伐採され、現在は切株は銅板で覆われている。

■貞昌院の由緒縁起

貞昌院の前身は、天性院と称した天台宗の宿坊。（上之坊、下之坊）

足利時代に廃絶。下之坊には菅原道真四男、管秀才淳茂が起居、道真自刻の尊像を奉祀して朝夕崇拝したのが、天神社（永谷天満宮）となる。

天正10年(1582年)宅間藤原規富が天神社を再建するにあたり、川上・徳翁寺四世住職明堂文龍大和尚を請し、籠森に貞昌院を建立。天神社の別当となつた。

文化14年(1817年)、天神社と山を挟んだ位置から永谷天満宮の隣に移転。

明治19年(1886年)の火災により、堂宇が消失。本尊十一面觀世音菩薩像と欄間彫刻などは、近隣檀家の方々によって無事搬出され、山門、鐘楼なども難を逃れた。

明治34年(1901年)、第28世無外源量大和尚代に諸堂が再建。

関東大震災による倒壊を経、翌年に亜鉛葺きの伽藍として再建。

昭和46年(1971年)に、銅版葺となり、現在の姿に改築された。

■天神おみくじについて

天神おみくじは、貞昌院に200年前から伝わる、由緒あるおみくじです。

横浜の文化財（横浜市教育委員会編）には、おみくじについて次のような解説があります。

1.御籤匣

匣は黒漆塗りの直方体で、正面に金地仕上げのうめばちの紋を描き、上端中央に竹簡の籤ができる穴を持つ。裏面には朱の「天神山貞昌院 十四世哲航大賢五修彦命代 江戸中橋正木 町清水舊長門弟中」の銘がある。寸法は巾・奥行き12.2cm、高さ31cm。

※寛政年間（1789-1800）



2.竹簡

竹簡の籤は、平均巾0.8cm。長さ18.9cm。上端部に吉凶と三桁の数字番号、下端部に通し番号。

3.版木

版木は裏表両面に各2枚の版を固定したもので、一面で2種類の御籤札を刷ることができる組み版となっている。組み合わせは竹簡の番号に準ずる。札一枚の平均的寸法は横15.5cm、縦21cm。組み版木の寸法は46.5cm*24cmである。

(横浜の文化財（横浜市教育委員会編）より抜粋)

おみくじの内容

吉凶・番号 概要 絵 和歌

<本文>護り本尊・願事・病事・生死・失物・待人・お産・争事・縁談・学問・商売・結文・番号

■永谷村を訪れた高浜虚子一行

今度の武藏野探勝会は全く（高浜）虚子先生御自身が一切斡旋せられたのであった。元先生のお宅に勤めてゐた女中さんの周旋で其女中さんの近所のお寺とせられたのである。一行の分乗した二台の貸切のバスが坦々たる横浜街道を東に、左右に豊の秋を展じた中を二十分程走って上永谷村に到った。

バスの中で、先生が水竹居さんに「あの灯のともってゐる家ですよ」と窓外を指す彼方の丘の麓の森の中に、夕闇をこめてぽかりと灯つてゐるその女中さんの家が見えた。車中の私達は皆首を伸べてその灯影を懐しく顧みるのであった。

天神山貞昌寺は丘がかりの小高みにあつた。本堂は大震災に倒壊したさうで、近年漸く新築が成ったばかりのやうであったが、庫裡は元のままに藁葺き屋根もいと古りてゐた。

門前に小川がせせらいでをり、そこらには穂芒が群がり萩が枯れそめ菊畠を持った小屋などがあつた。

お寺の住職さんは大層篤志の方で又此村の小学校の校長さんである由、先の先生の女中さんも其教へ子であるとの事。

永谷村は、かの菅相丞の旧跡であつて、菅公筑紫への遠流の時その子秀才も東なるこの地に遠ざけられ、後菅公の罪あらざる事明らかになるに及んで秀才是京洛に呼び戻されたが、その没するに当つての遺言によりその遺髪をこの里に送り埋祭されたといふ故事がある。永谷鎮座の天満宮には、寺の裏山になつてゐる老杉繁る中にあり、そこには歌碑、菅秀塚などが存する。

『武藏野探勝』谷の秋（第75回）より一部引用（編者・高浜虚子、有峰書店）

■上永谷から眺める富士山

港南区には武相国境の分水嶺の山並みが南北に走っています。

したがつて西方向の見通しが良く富士山がよく見えます。富士見台という地名もあります。

富士山はほぼ真西（正確には真西より若干南側）に位置しますので、春分よりも数日早い日にダイヤモンド富士が観測されます。今年は3月17日の夕刻です。



上永谷からの富士山の眺望（亀野撮影）

